対談 守破創

クラシックの型にはまらない演奏で観客を魅了し、異なるジャンルのアーティストとの共演で新しい舞台も創出するバイオリニスト・川井郁子さん。独自の感覚で彩られる音楽はどのように生まれるのか。クラシック・ギターに造詣の深い鈴木人司審議委員と、その音色の原点や楽器の秘密に関することまで語り合った。

異なるものとの出会いが生む自分だけの新しい世界の音色

日本銀行政策委員会 審議委員

鈴木人司

SUZUKI Hitoshi

1954年東京都生まれ。77年慶應義塾大学経済学部卒業後、（株）三菱銀行に入行。2002年（株）東京三菱銀行市場企画室長、06年（株）三菱東京UFJ銀行執行役員市場企画部長を経て、常務取締役、専務取締役、副頭取、顧問などを歴任。17年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

バイオリニスト・作曲家

川井郁子

KAWAI Ikuko

香川県高松市出身。東京藝術大学卒業・同大学院修了。現在大阪芸術大学（演奏学科）教授。国内外の主要オーケストラをはじめ、世界的な指揮者チョン・ミョンフンやテノール歌手ホセ・カレーラスなどと共演を果たす。また、アルバム『ザ・レッド・ヴァイオリン』（2000年）や『LUNA』（2017年）などは、クラシック界では異例のセールスを記録している。演奏以外でも、映画『北のカナリアたち』（2012年）の音楽を担当し、第36回日本アカデミー賞・最優秀音楽賞を受賞したほか、「川井郁子 Mother Hand 基金」を設立し、タイなどの難民キャンプでのボランティア活動も行うなど活躍の場を広げている。

ジャンルを超えた音楽家が進むべき道を示してくれた

鈴木　今回対談をお願いしましたのは私が川井さんのファンだからですが、今でも心に浮かぶのが、もう一〇年以上も昔、かつしかシンフォニーヒルズでの公演で聴いた音色です。当時、私は三菱東京UFJ銀行（現・三菱UFJ銀行）市場部門長としてリーマン危機の対応に当たっていました。日々、有価証券の価値がどんどん下がっていくような状況で、精神的に追い込まれていたんです。でも、そのときに聴いた川井さんのバイオリンに救われました。優しくて美しく、とても癒やされる音色だったからです。

川井　うれしいです。ありがとうございます。

鈴木　ご出身は香川の高松市でいらっしゃいますが、バイオリンとのかかわりは、どのように始まったのでしょうか。

川井　母がクラシック好きで、私は四歳からピアノを始めました。六歳のとき、リビングで母と洗濯

写真 野瀬勝一

物をたたみながらラジオを聴いているとブルッフ（注1）の協奏曲が流れてきたんです。そのバイオリンの音色にすごく感動しました。「この楽器がやりたい」と母に頼むと、「お父さんがいいって言ったらね」と。父は「子どもの気まぐれだろう」と最初は反対でしたが、何度もお願いして。半年以上粘ったでしょうか（笑）。クリスマスの夜、父がバイオリンを手に帰ってきたんです。

その日から、弾き続けています。最初の先生は趣味で弾いていらっしゃる方でしたが、小学四年生のころ、東京藝術大学（以下、芸大）を出た方が香川に戻ってこられたんです。私は子どもながら「この道を進もう」と決心しその方に師事することにしました。毎週日曜日、レッスンのために別の市まで片道三時間かけて通いました。高校時代には東京にもレッスンで通っていました。本当にレッスン漬けでしたね。

鈴木　その後、芸大を卒業されプロのバイオリニストになられましたが、これまでバイオリンを嫌いになったことはありませんか。

川井　バイオリンが嫌いになったり、レッスンをさぼりたいと思ったことは一度もないですね。ただ、「バイオリニストに向いてないのではないか」と思い悩んだ時期はありました。高校時代、練習で一〇〇％仕上げていたのに、本番の舞台で真っ白になって大失敗してしまい、自分を信用できなくなったんです。聴いている人にもはっきりわかる失敗はその一回だけですが、そこからしばらくは舞台恐怖症になって……。

鈴木　川井さんほどの方でもそうしたご経験があるのですか……。そうした状況をどうやって克服されたのですか。

川井　ひたすら練習です。クラシック音楽の演奏では作曲家の意図を忠実に解釈して表現することが求められます。「楽譜を全部絵として記憶に入れなさい」という先生もいるほどです。舞台恐怖症を克服するために、寝ていても弾けるぐらい必死で練習しました。

そんな経験から芸大に入学したころは「ソリストにだけは絶対ならない！」と思っていたんですが、ソリストに。いろんな人や曲との出会いがあって、今は人前で自分の表現したい音楽を弾くのが、一番好きになりました。

鈴木　やはり練習によってトラウマを克服されたんですね。ところで、川井さんのコンサートではアストル・ピアソラ（注2）の「リベルタンゴ」の演奏が定番になっていますね。私も「ブエノスアイレスの四季」をギターで弾いたりしますが、ピアソラのどのようなところがお好きなのでしょうか。

川井　ピアソラは私に、音楽家として進むべき道を示してくれたと思っています。

ピアソラに出会う前、私はすでにデビューしていて、バイオリンでポップスを弾いたり、映画やテレビに出演させていただいたりしていました。クラシックの枠を超えるような演奏の場を与えていただくたびに、喜んで引き受けていたのです。しかしそうした依頼をこなすうちにバイオリンへのモチベーションを保つことが難しくなってきました。これなら私でなくても代わりの人が演奏できるのではないかという思いが強くなってきたんです。

ピアソラを聴いたとき、一瞬で自分の迷いが吹き飛びました。これまで聴いたどの音楽とも違う。もともとタンゴのアーティストでありながら、さまざまな音楽の要素を吸収し、「ピアソラ」として新しいジャンルの音楽を生み出している。私もそういう姿勢で、自分に一番合う音楽を創りたいという目標ができたんです。

「新しいアルバムを出さないか」というお話をいただいたのは、ピアソラと出会った直後でした。CDの売り上げをあげるために、ショパンのピアノ曲や有名歌手の楽曲をカバーしようという案でした。ですが私は「自分の表現したい音楽がある。私が思うままにやらせてほしい」と、初めて言った

（注1）マックス・ブルッフ（一八三八～一九二〇年）ドイツの作曲家。バイオリン協奏曲第1番ト短調が有名。
（注2）アストル・ピアソラ（一九二一～一九九二年）アルゼンチンのバンドネオン奏者、作曲家。踊るための音楽であったタンゴを、聴くための音楽に変革し、新ジャンルを確立。代表作に「リベルタンゴ」、「ブエノスアイレスの四季」など。

んです。創り上げた『ザ・レッド・ヴァイオリン』で私は本当の意味でデビューできたように思いました。

発売後の最初のコンサートで、妹が「お姉ちゃんが一番演奏を楽しんできてね」と言って舞台に送り出してくれました。それから私は、舞台でバイオリンを弾くとき、迷いなく自分の内面を出せるようになったんです。

奏者が肌触りを感じる一八世紀の名器の音色

鈴木　私は趣味でクラシック・ギターを弾くのですが、楽器によって音色が違うんです。私が気に入っているアントニオ・デ・トーレス（注3）のギターは太くて甘くて温かい音がしますが、重厚感のある音や瑞々（みずみず）しい音の出るギターもあります。川井さんは現在、一七一五年製のストラディバリウス（注4）を使っておられますね。ストラディバリウスはほかのバイオリンと比べてどのような違いがあるのでしょうか。

川井　ストラディバリウスは名器ではありますが、奏者にとっては一癖も二癖もある難しい楽器です。最初は素直に応えてくれず、音を出すのに苦労します。こうした印象はどのバイオリニストも言いますね。でも、半年ほど弾いて慣れてくると、奏者に応えてくれるようになる。バイオリンは体に密着させて弾く楽器なので、体も振動させながら音が出ていきますが、奏者自身に伝わるその音色が本当に滑らかに、肌触りよく感じられるんです。

もう一つ、ストラディバリウスの不思議なところは、耳元で鳴る音と、遠くに届く音が違うんです。耳元でほかの楽器に音量が負けているように聞こえても、遠くではバイオリンの音がしっかりしています。「遠鳴り」がする楽器なのです。

鈴木　優れた楽器は遠達性がありますし、コンサート会場でも一番後ろの席が最も良い音を聴けると言われます。ストラディバリウスの製作の秘密については、材質や乾燥具合など多様な研究がなされていますが、まだ解明されていません。ストラディバリウスの製作者であるストラディバリは弟子にも作り方のすべてを伝授することはなかったそうですね。現代の技術をもってしても楽器製作の謎が解けません。そういった製作過程を経て出来上がった楽器、あるいはその製作者に、私は敬意と感動を覚えずにはいられません。

音ということでは、川井さんが以前、東京文化会館小ホールでの公演で「今日は生音でお届けできますから、皆さんラッキーです」というお話をされたことが印象に残っています。スピーカーを通すと人間に聴こえる音域でしか再生されない、しかし実は聴こえない音域にこそ脳への刺激効果がある、という話を聞いたことがあります。生音とスピーカーを通すのとでは、そういう違いもあるのでしょうか。

川井　それは圧倒的に違うと思います。レコーディングするときもマイクを通した音になるわけですが、マイクの性能によっても音が変わりますし、生の音を再現するのは、どうやっても無理ですね。

とくに、ストラディバリウスは倍音（注5）が多いので、マイク録音には向かないと思います。音色が硬くなってしまうんです。広いホールで距離をとって録音ができれば、ストラディバリウスの良さが発揮できますが、スタジオでは難しいです。

鈴木　倍音が多彩に出てくることで楽器の音色は複雑さを伴って、それが人に心地良さを感じさせるのでしょうね。

川井　そうですね。生の音には波動みたいなものも含まれますから、弾いている人の魂とか気持ちも生じゃないと伝わってこないと思います。コロナ禍の影響で生演奏の機会がなくなり、私も含めて多くの演奏家がインターネットで配信していますが、やればやるほど、やはり生で弾きたくなりますね。コンサートでは、弾く人が奏でた音楽を聴く人が一方的に受け取るだけだと思われがちですが、意外と双方向なんです。お互いの波動のやりとりによって、演奏家は聴いておられるお客様から刺激を受けながら、次の音、また次

の音と奏でていくところがあります。舞台やコンサートは、演奏家だけでなくお客様と一緒に作っていくものなんです。

音楽との一体感を求めてジャンルを自在に往来する

鈴木　川井さんは、国内外の主要オーケストラはもちろんですが、世界的な歌手やバレエダンサー、フィギュアスケーター、あるいは雅楽の方とも共演されています。つねに新しいコンサートスタイルを追求されていることに驚かされます。

川井　異なるジャンルの方々と共演すると、それまで感じられなかった感覚で弾けるんです。ジャンルの「越境」から生まれる化学反応とでも言いましょうか。舞台で新しいものに出会うことができる。そのとき、私は一番ワクワクします。

　来年は、集大成として細川ガラシャ（注6）をモチーフに西洋の楽器と東洋の音色を組み合わせた形で音楽舞台を創りたいと考えているんです。

　ガラシャは戦国武将の娘に生まれたキリシタンですから、東洋と西洋の両方の音楽で舞台を彩ることができる。過酷な運命にもかかわらず自分の意思で生き抜いたガラシャに惹（ひ）かれるんです。

鈴木　作曲家としても精力的に活動されていますが、作曲は川井さんにとってどのような時間なのでしょうか。

川井　ガラシャの舞台に向けて、毎日のようにピアノに向かっています。私にとっては作曲も、自分の内面を解き放てる時間です。ピアノで和音をたたいていると心が落ち着き、イメージも膨らんでメロディーが降りてくる。それを曲として組み立てていきます。曲がすとーんと降りてくる感動というか、産み落ちてくるときに感じる感動、気持ちよさは作曲の醍醐味（だいごみ）です。そういう瞬間があると、これは神様からのご褒美だと思うようにしています。

鈴木　川井さんは、演奏活動や作曲活動にとどまらず、タイやウガンダなどの難民キャンプを訪問してボランティア活動もされているそうですね。

川井　私自身、子どもを授かったことで、世界の子どもたちに目を向けるようになりました。主宰する「Mother Hand 基金」では、そのときどきでご縁のあった団体や活動に協力させていただいています。非常に過酷な環境の中で生きている子どもたちですが、私がバイオリンを弾くと本当に音楽を体で楽しんでくれます。彼らから音楽の根源的な魅力や力といった、普段忘れがちな多くの大事なことを思い出させてもらっているんです。作曲やボランティアといった、演奏とは離れたものとの出会いを通して音楽と一体となるような経験を大事にしていきたいですね。

　そして、バイオリニストとして、バレエやフィギュアスケートなど異なるジャンルの方々との共演などを通して自分を高め、聴いてくださるお客様に感動を与えられる音楽を創っていければと思っています。

鈴木　本日は、貴重なお話をありがとうございました。

（注3）アントニオ・デ・トーレス（一八一七～一八九二年）
スペインの楽器製作者。ギターのストラディバリと言われ、現在製作されているクラシック・ギターの原型となるモダンギターを製作した。

（注4）ストラディバリウス
イタリアの楽器製作者、アントニオ・ストラディバリ（一六四四～一七三七年）によって作られた弦楽器のこと。現存するストラディバリウスは全世界で五〇〇～六〇〇丁とされ、バイオリンが圧倒的に多い。

（注5）倍音
原音の振動数の二倍、四倍など、整数倍の振動数を持つ音のこと。倍音成分がバイオリンの複雑な音色を生み出す。ストラディバリウスの場合、耳には察知できない倍音がつねに多く出ているという。

（注6）細川ガラシャ（一五六三～一六〇〇年）
明智光秀の三女。豊前国小倉藩初代藩主細川忠興の妻。父光秀が本能寺の変で織田信長を討つも、直後の山崎の戦いで夫忠興が味方する豊臣軍に敗れた。このため、「謀反人の娘」として幽閉、監視される等過酷な日々を送る。そうした中でキリスト教の教えを知り、キリシタンとなる。